

JRCC NEWS

2007 秋季号



レスポンシブル・ケア



弘前城公園の紅葉の向こうに津軽富士（岩木山）の雄姿が見えました。
(JRCC 職員 福光)



遊行寺（藤沢市）の屋下がりです。シルエットが気に入っています。
(日化協職員 花井荘輔さん)

КООПЕРАЦИЯ
С ГИЛЬДЫ
2007

J R C C だより

☆行事予定

- 11月26日 消費者との対話（大阪）
- 12月11日 RC 報告書報告会（東京）
- 12月18日 消費者との対話（東京）
- 12月20日 RC 報告書報告会（大阪）
- 12月21日 JRCC 顧問会議
- 2008年2月14日 会員交流会（東京）



レスポンスブル・ケア活動の発展のために



独立行政法人
製品評価技術基盤機構 理事長
御園生 誠

レスポンスブル・ケア (RC) なる語をはじめて見たのは米国化学会の雑誌に載った特集記事だったので、それからずいぶん経つ。その後、2000 年前後にグリーン・サステイナブルケミストリー・ネットワーク設立の際、レスポンスブル・ケアが引き合いに出た程度であったが、いまや、レスポンスブル・ケア活動は日本の化学業界の中に定着し、あちこちで期待を込めて話題になっている。まことに喜ばしいことである。これは、関係各位の不断のご努力とともに、産業活動において市民（消費者）の存在が大きくなり、製造者とその製品に対して責任を持つことと市民がその影響の大きさを理解することが、重要性を増したことの反映でもある。

そこで、レスポンスブル・ケア活動と化学産業のさらなる発展を願って、化学業界にさらに踏み込んで実行していただきたいことがある。それは、化学製品の有用性と安全性（負の効果を含め）について、「自らの責任」で、積極的に社会、消費者に直接に訴えていただきたいということである。化学製品は社会にとって間違いなく不可欠である一方、絶対安全も環境負荷ゼロもない。従って、消費者に対し安全であると説得するとか、法令上の責任を回避するとかにとどまるのではなく、自らの責任で、ライフサイクルを通じた安全性、環境調和性を評価し、市民の立場に立って有用な製品を設計・製造し、そのことを世に問うていただきたい。そのためには、市民に対してだけではなく企業技術者に対しても意識改革を求めねばならず、企業はより重い責任を担うことになる。

具体例をあげると、塩ビのように製造者と消費者の理解が進み、用途の選択や使用法が適切になってきたものがある一方、売れ筋の化学関連製品で本当に安全なのか環境にやさしいのか疑問に思えるものや、製品の一部に使用した材料をもって製品全体が環境によいと誤解させかねない宣伝がある、などである。このような状況を見るにつけ、科学的合理性のある正攻法の発言を化学業界に期待したくなる。今後は、このような活動も含め、レスポンスブル・ケア活動自体が化学産業の存在意義を世に問うことになるのではないだろうか。

さらに、こういった方向を目指せば、サプライチェーンに沿った関連企業や中小企業との連携も広がるものと期待できる。国際的な化学物質管理のしくみが大きく変革しようとしている現在、関係業界や市民と認識を共有しながら、競争力と持続性が両立しうる長期的な戦略を立てて進むことが大事である。化学物質のリスクや製品安全を業とする機構にいと一層その感を強くする。化学業界が既に各種の努力をされていることは承知のうえで、あえて率直な期待を申し上げた。

さらに、こういった方向を目指せば、サプライチェーンに沿った関連企業や中小企業との連携も広がるものと期待できる。国際的な化学物質管理のしくみが大きく変革しようとしている現在、関係業界や市民と認識を共有しながら、競争力と持続性が両立しうる長期的な戦略を立てて進むことが大事である。化学物質のリスクや製品安全を業とする機構にいと一層その感を強くする。化学業界が既に各種の努力をされていることは承知のうえで、あえて率直な期待を申し上げた。

化学業界の安全活動についての DVD を作りました

日化協と JRCC は会員の労働災害防止の取り組み、保安防災活動、安全活動、および安全表彰制度を紹介するビデオを作製し、すでに各会員会社にお送りしています。ビデオは日本語、英語、中国語版を 1 枚の DVD に収録しています。日本の安全活動を海外で紹介する時などにも是非ご利用ください。

【収録内容】

1. 労働災害を防ぐために (12 分 30 秒)
 - ・安全活動
 - ・ヒヤリハット活動
 - ・体験学習
 - ・防災活動
2. 安全表彰制度の進め方 (4 分 8 秒)
 - ・安全表彰の流れ
 - ・現地審査
 - ・表彰式
 - ・安全シンポジウム

※収録に当たっては、帝人（株）三原事業所、三菱化学（株）鹿島事業所、（株）エムネット、チッソ石油化学（株）千葉製造所のご協力をいただきました。

注)DVD は NTSC 方式で記録されていますので、PAL 方式のプレーヤーでは再生できません (DVD ドライブのあるパソコンでは再生できます)。



※未だ在庫が若干ありますので、ご希望の方は下記まで FAX にてお申し込みください。

<販売価格：500 円（送料含む）>

本品送付時に振り込み用紙を同封いたしますので、振込みにてお支払いください。

(社) 日本化学工業協会 広報部

FAX 03-3297-2615

TEL 03-3297-2555



DVD の内容 (上) と映像の一部 (左)

日中化学官民対話で安全ビデオ紹介

平成 19 年 9 月 27 日に北京賽特ホテルにて、中国側より中国石油和化学工業協会 (CPCIA) 李会長を含め 50 名、日本側からも日化協・富澤会長を含め同じく 50 名ほどが参加し、第 5 回日中化学官民対話が開催されました。

はじめに、CPCIA より「中国化学産業の現状」、経済産業省・山根化学課長より「日本と中国の化学産業の展望と課題」の 2 つの基調講演があり、その後、REACH への対応、日本の省エネルギーの技術集や各社の省エネルギー事例等についての発表、検討が行われました。

最後に、「労働災害を防ぐために～日本の化学業界の取り組み～」の DVD を中国語バージョンにて参加者全員で視聴し、盛会のうちに終了しました。

中国側参加者には、今後の安全活動の参考にも、各社の工場現場の方々にも見てもらうため、



視聴した DVD を 1 枚ずつ配布しました。この DVD は、JRCC 会員企業には、既に配布してありましたが、中国に拠点におく現地の日系企業からも、従業員の啓発のために入手したいとの要請があり配布しました。



Responsible Care Leadership Group

ICCA-RCLG

ICCA-RCLG 総会が、10月22～25日の3日間パリにて開催されました。同会議は、RCLGに加盟する52カ国の代表が、年に一度集まる総会として位置づけられており、今回の会議には31カ国より約70名が出席しました。

3日間の会議でしたが、時間が不足がちであるほど多くの議案が討議されました。冒頭では、ICCA全体の活動状況と、ICCAのワーキンググループの再編について、RCLGのPhill Lewis議長より報告がありました。

ロシアのRCLG加盟

今回の会議の中で最大の議案は、「ロシアのRCLG加盟」でした。ロシアでのRC活動はフィンランド化学工業協会がサポートして2005年1月から進められており、まずそのサポート活動の概要が紹介さ

れ、ついでロシア化学連合より活動の詳細が報告されました。その後ロシアが退席の下でロシア加盟の是非を討議した結果、満場一致で加盟を認めることになりました。ロシア化学連合に加え、ロシア化学労働組合が加盟しているのが特徴です。今後は、中東諸国と中国の加盟が、大きな大きな課題となります。

プロダクト・スチュワードシップの進め方

レスポンシブル・ケア世界憲章への署名についても増えてきており、世界の主要な化学企業128社のトップが署名して賛同を示しています。

グローバル・プロダクト・ストラテジーの中での大きな要素であるプロダクト・スチュワードシップの進め方についても討議がなされ、まずガイドラインと写真の説明が行われ、その後二つのグループに

総会参加報告

分かれて、各国でこれを実行する上での問題点が討議されました。

また、ロゴマークの商標登録は各国の協会ごとに行われていますが、最近類似のロゴが散見されることから、これらを如何に排除するかについて討議が行われました。ロゴマークのブランドを確立し、メンバーとしてのメリットを確保するとともに、RC活動拡大のインセンティブにすることが目的です。

JRCCによる キャパシティ・ビルディング

JRCCは、キャパシティ・ビルディングの中でワークショップ開催準備状況の報告を行いました。本ワークショップは、11月12～14日にマレーシアのクアラルンプールで開催されるAPRCCに付帯して開催予定であり、第3者検証をテーマとして米国・

ニュージーランド・日本より異なる検証方法を紹介した後、討論を行うというプログラムを組んでいます。マレーシア化学工業協会の協力を得て開催準備は順調に進んでおり、100名以上の参加者を見込んでいます。

その他、ドイツ、ギリシャ、インドによるピアレビュー、パフォーマンスデータ説明、流通会社の品質を評価する手法としてのSQASの紹介等が行われました。

地球温暖化や化学製品の安全性等、グローバルな対応を行わねばならない問題であることから、今後ともICCAの果たす役割は益々大きくなると思われ、日本もその一員としてレスポンシブル・ケア活動はもとより、ICCA全体の活動に貢献することが必要と思われれます。

収益を抑制しても、 果たすべき企業の社

三菱ガス化学株式会社

代表取締役 専務執行役員 上松 正次さん

生産品目の80%以上が自社開発製品

——三菱ガス化学の概要から聞かせてください。

上松 当社は1971年に三菱江戸川化学と日本瓦斯化学工業が合併して発足しました。三菱江戸川化学は1918年に三菱製紙の出資により江戸川バリウム工業所として設立されバリウム塩類の製造からスタートし、日本瓦斯化学工業は1951年に設立され日本で最初に天然ガスを原料とするメタノールの生産を開始した会社です。従って、三菱ガス化学の「ガス」の由来は天然ガスということになります。存在理念として「MGCは、化学にもとづく幅広い価値の創造を通じて、社会の発展と調和に貢献します」という言葉を掲げ、基礎化学品からファインケミカル、機能材料まで広範囲に事業を展開しています。その結果、世間では「何をやっているのか、よく判らん」という声も聞かれますが(笑)。2000年には、事業部制から4つのカンパニー制に移行しました。天然ガス系化学品カンパニーではメタノールやアンモニアの生産と、それらを原料とした誘導品、またバイオテクノロジーを

用いた生物化学製品等を製造しています。芳香族化学品カンパニーはキシレン異性体、特にメタキシレン誘導体の開発を中心に行っており、メタキシレンジアミン、MXナイロン、イソフタル酸などが主力製品です。機能化学品カンパニーでは過酸化水素をはじめとする誘導品やエンジニアリング・プラスチック等を取り扱っています。特殊機能材カンパニーではBTレジン素材とする多層プリント配線板用材料や、エージレスに代表される脱酸素製品を製造しています。経営理念の一つに「技術の向上、環境保全、安全確保に努め、より良い製品を提供する生産活動」がありますが、生産品目の80%以上が自社開発製品であるという点に、それが具現化されていると思います。海外における生産活動も積極的に展開しており、サウジアラビアやベネズエラでメタノール、アメリカ、タイ、韓国、シンガポール、台湾でエンジニアリング・プラスチック、半導体関連製品等の事業により、各国の経済発展に寄与しています。2006年度の売上は連結ベースで約4,800億円、単体で約3,600億円です。

——環境関連製品にも力を入れているようですね。

上松 エーゼンズやメタノール、過酸化水素といった製品は省エネルギー・省資源、廃棄物削減に貢献していると思います。環境薬剤は文字通り環境浄化に役立ちますし、脱フロン・脱塩素系の半導体素材等、社会のニーズに沿ったグリーン商品を提供しています。

新鮮な気持ちで レスポンスブル・ケア活動を

——レスポンスブル・ケア導入時はどのような状況でしたか。

上松 以前は無事故・無災害を中心とした労働安全衛生や、公害防止が活動の主体でしたが、1995年にJRCC加入、97年にレスポンスブル・ケア実施宣言を行ってから非常に幅広い内容が要求されることになりました。JRCC加入から実施宣言までに2年間のタイムラグがあるのは、理念や活動内



環境関連展示会 ECOMA2006

会的責任があると考えています。

容の把握、浸透に時間を要したからです。省エネルギー・省資源や廃棄物の削減・リサイクル、環境負荷の低減、製品安全といった課題に数値目標を立てて取り組むことに当初は戸惑いもありましたが、新しい活動として新鮮な気持ちで捉えられた部分も多かったと思います。

——具体的な活動は？

上松 レスポンスブル・ケア実施宣言と同時に各工場プロジェクトチームを組織し、ISO14001の認証取得活動を開始しました。1998年新潟工場をかかわりに2001年に国内全工場認証取得を完了しました。

——レスポンスブル・ケアに対する現場の反応はいかがでしたか。

上松 社会的に環境問題がクローズアップされるという時代の要請もあり、一人一人がレスポンスブル・ケアの意義と必要性を自覚してくれたと感じています。同時に経営者側からも、そういった現状認識に基づく発言が多く見られるようになりました。当社ではRC監査に力を入れているが、その際に社会から信頼を得るためには必須の活動であることを強調し、理解を求めてきました。

海外の拠点から刺激を受けるケースも

——いろいろな分野で成果が上がったと思いますが…。

上松 まず、自分達の生産活動が社会と密接に関わっていることを実感できた点が大きいですね。パフォーマンスの面では廃棄物の削減に特に効果が見られ、10年間でPRTR対象物質は1/4以下に、最終埋処分量は1/6以下に削減されました。また、国内の半数に当たる3工場ゼロエミッションが達成されるなど、事業所間の競争原理も働いています。

——海外の生産拠点でもレスポンスブル・ケアを導入していますか。

上松 必ずしもレスポンスブル・ケアという言葉を用いている訳ではありませんが、基本的には日本と同等のレベルで活動し、年に3箇所ずつ監査も実施しています。ただし海外の場合は監査結果を強制するのではなく、現地の状況を把握し、環境・安全に関する交流を図るという側面もありますね。サウジアラビアの合併企業はアメリカやイギリスのマネジメントシステムを取り入れており、日本より進んでいる部分もあるので、こちらが刺激を受けるケースもあります。

——環境・安全活動に関するコストについては？

上松 最近ではCSR活動の一環として受け止め、改善しなければならない点があれば速やかに対策を講じるという姿勢で臨んでいます。場合によっては、収益を抑制しても果たすべき企業の社会的責任があると考えています。企業の品格が問われる部分ですね。

全社で無事故・無災害を達成したい

——安全技術の伝承についての対応はいかがですか。

上松 会社全体の施策として雇用延長等を含めた定年制度の見直しを行うと共に、事業所単位では過去のトラブル事例の検証や体験学習など、様々な安全教育を実施しています。安全に関しては各自が常に意識して行動することが重要ですから、効果がすぐに現れなくても地道に続けていくしかないと考えています。

——産業界では事故・災害が増加傾向にありますね。

上松 現在、日本の企業が直面している最も大きな課題は設備の老朽化でしょう。全てを新設する訳にはいきませんから、検査対象・技術を効果的に選定し、不具合が発見された場合には素早く対応しなければなりません。この点については「疑わしきは罰する」という姿勢が要求されると思っています。対処法を誤れば、国際競争力を失うことにもなりかねないという危機感を持っています。

——今後の目標を聞かせてください。

上松 全社的に無事故・無災害を達成することが最大の目標です。そのためにはマンネリ化を防ぎPDCAを確実に回すと共に、RC監査等を通じてトップの決意を明確に伝えていくことが必要だと考えています。現在、私共のレスポンスブル・ケア活動は当社と国内の関連会社が主体となっていますが、これを海外まで拡げて更にレベルアップしていきたいと思っています。

——最後にJRCCに対する要望があれば…。

上松 会員交流会等で、実際に現場で活動している担当者が本音で意見交換できる場を設けていただきたいですね。また、海外の先進的な活動事例をJRCC NEWS等で紹介していただければ、参考にしたいと思います。



地域自治会との対話

事業所の概要

滋賀水口工場は積水化学工業株式会社の化学品事業の開発・生産の拠点として1960年11月に開設されました。現在は高機能プラスチックカンパニーの中核工場として、自動車用・建築用合わせガラスの中間膜として用いられる透明で強靱なフィルムや、プリント基板用接着剤等に使用されるポリビニルアセタール樹脂系接着剤、LCD（液晶パネル）のスペーサーとして用いられる真球状のプラスチック微粒子やこれにメッキを施した異方導電材料、液晶パネルの封止に用いられる紫外線硬化樹脂などの開発・生産を行っており、いずれの製品も高いシェアを持っています。

「お客様と共に発展し、世界で勝てる工場づくり」をスローガンに、常に世界に目を向けた製品の開発・生産に取り組み、全事業とも海外販売比率50%を超えるグローバルな展開をしています。



工場正門

レスポンスブル・ケア活動

滋賀水口工場は田園地域の丘陵の上に位置して、なんと工場敷地内に古墳（かんづか 罐子塚古墳）がある工場です。高台にあるため騒音が伝わりやすい、臭いが遠くまで届きやすいとのことで、きめ細かに対策を立てています。

積水化学グループの「ステークホルダーの期待に応え、社会的価値を創造する」という企業理念の実現に向け、地域に根ざした工場を目指しています。

1999年にはISO9001認証を全製造部門で、1998年にはISO14001認証を取得し、2000年にはゼロエミッションを達成しました。事務所等ではゴミを22種類に分別するなど従業員の意識改革にも努めています。

CO₂排出量削減活動としては、種々のプロセス改善や発電用燃料転換によって、この4年間で25%以上の生産量増大にもかかわらずエネルギー原単位は13%削減し、排出量は4%の増大に抑えました。また環境対応として、合わせガラスの中間膜に遮熱機能を付与して、自動車のエアコンの負荷を下げる（燃費を上げる）製品等を開発し製造しています。

工場排水は思川・野洲川を経て琵琶湖に流れるため、県の排水基準値は国の基準の1/8と大変厳しいですが、工場では更にこの規制値の半分で管理をしています。

地域とのコミュニケーション

工場写真の通り工場正門の両側には桜が植えられており、春には地元老人会を招待した花見会を毎年開催し大変喜ばれています。また、工場周辺は田園地帯ですが最近はこの辺りでも子供は自然と触れ合うことがなくなっていることから、「積水化学自然塾」を開催して身近な自然と触れ合う活動を全社的に展開し、既に39回行っています。

更に昨年は工場の環境の取り組みについて地域の皆様の生の声を聞いて対話する「環境フォーラム」を初めて開催しました。地域住民の忌憚のない意見が得られ大変有意義な会であったことから、今後も継続していく予定です。



積水化学自然塾



ゴミ分別用エリア

事業所の概要

川崎製造所は川崎のコンビナート地帯の千鳥地区と浮島地区に工場があります。1959年に日本触媒独自の触媒技術により、国産では最初の酸化エチレンの本格生産を行うことからスタートし、現在では国内最大級の酸化エチレン製造設備を保有しています。

製品は、酸化エチレンの他、酸化エチレンの誘導品であるエチレングリコール、エタノールアミン、高級アルコール、グリコールエーテル等を生産して、それぞれポリエステル繊維原料、シャンプー、合成洗剤、印刷インキ等に用いられています。またアクリル酸やメタクリル酸を利用したカルボン酸系ポリマーはコンクリート混和剤として評価が高く、主力商品の1つとなっています。



工場全景

レスポンスブル・ケア活動

「安全が生産に優先する」が全社の基本原則です。これは1973年に、当時発生した一連の石油化学工場の火災爆発事故多発を受けて社長が自ら決めたことです。更には「稼働中に異常を発見したときは直ちに操業を停止する（その責任は一切問わない）」を保安管理の基本原則としています。

1991年から5387日間無災害記録を継続中でしたが、残念ながら2006年に休業災害が発生しました。慢心、油断、不徹底な面があったと反省して、初心に帰って基本安全活動（5S、KY、HH活動等）を徹底するとともに、コミュニケーションの充実による安全性の向上を目指した課単位の「安全のチームコミュニケーション活動」を発足させてゼロ災の継続に再チャレンジしていま

災害事例研究会

災害現場の確認・検証



事例検討会



災害事例研究会

す。また若手の危険予知能力を向上させるため、体験学習や職場リーダーによる災害現場の確認・検証を含めた災害事例研究会を実施しています。

保安防災の面では、13年間災害レベルの設備トラブルゼロを継続中です。HAZOP等によるリスクアセスメント（変更管理）を実施して危険度を評価し、改善を行っています。

環境保全面では、廃棄物のゼロエミッション達成に取り組んでいます。埋め立て廃棄物ゼロを目指して、全従業員に分別体験学習を実施して、修了者はワッペンをヘルメットに貼っています。これらの取り組みに対して2005年に「かながわ地球環境賞」を受賞しました。

1997年にISO9002、2000年にはISO14001の認証を取得しています。

社会とのコミュニケーション

製造所はコンビナート内にあるため、地域住民への直接の影響はない立地ですが、レスポンスブル・ケア川崎地区地域対話への参加や、地域の清掃活動等を実施しています。

また高専の学生を受け入れて企業実習を行ったり、ASEAN研修生を受け入れてレスポンスブル・ケア活動（環境保全、化学品安全等）の紹介も実施しています。



ASEAN
研修生受け入れ



グループの発表風景

地域対話などを行う上で大切なコミュニケーションのスキルアップをねらった研修会を2007年10月2～3日、1泊2日で千葉県のクロスウェーブ幕張にて開催しました。4回目となる今年度は地域対話の幹事会社から20名、遠くは大分県からの参加者もいました。

1日目はまず小講義でリスクコミュニケーションについて理解を深めました。

- 考え方、性格、今までの環境などで状況に対する捕らえ方は各人違い、どうしても変えることのできない領域がある。話し合われるその問題がどの領域にあるかを考える必要がある。
- マスコミを対話の席に呼ぶ場合は事前に大学の先生を交えて勉強会を開くなど教育が必要。また記事にしやすいようなプラスイメージのおもしろい話題を用意するとよい。
- 話された内容はあまり覚えていなくても話し手の態度（姿勢、動作、表情、話し方）は覚えているものなので注意が必要。

「コックリさんを探せ」：頷いている人を3人探し、

その3点に視線を動かすようにすると全体を見渡すことができる。

その後「化学物質の排出によるリスク」、「大規模地震のリスク」、「臭気問題」というテーマを3グループに振り分け、ワークショップを行いました。近隣の住民、学校の先生、自治会長などの立場になって架空の事業所に対して想定される質問を洗い出していきます。実際にあったステークホルダーからの質問、意見をまとめた資料も参考にしました。

2日目はグループ毎に、前日の質問メモを基に事例発表資料を作成、説明者役とファシリテーター役を決めて模擬対話を行いました。インタープリターとして大学の先生という役を入れたグループもありました。専門家などの第3者が入ることで雰囲気が一変し、穏やかになるのがわかります。発表するグループ以外の人は地域対話参加者役です。皆さん役になりきって様々な質問が出され、活気のある対話となりました。

模擬対話後、講師による講評は以下のようなものでした。

- 臭気の問題は感覚的なものなので対応が一番難しい。基準値をクリアしても臭いを感じる人もおり、感覚の障害に対する対策には答えがない。相手の話をとにかく親身になって聞く、その姿勢が信頼関係を生む。
- 発表する資料の方にばかり視線がいきがちだが、意識してもっと参加者の顔を見て反応を見ながら話すようにすること。
- 後ろで手を組んだまま話すなどの自分の悪い癖を知ることが大事。口癖も気をつける必要がある。マイナス表現は控えること。「一応」、「とりあえず」といった曖昧な表現は避ける。



グループ毎に質問の洗い出し



平成19年度 会員交流勉強会が盛況のうちに終了しました

夏号でもご紹介しましたが、今年度の会員交流勉強会は「(化学物質)のリスクってなんだ?」というテーマで、日化協嘱託の花井莊輔氏に講師をお願いして、6月6日、8月8日、10月10日の3回にわたって開催しました。花井氏の著書「リスクってなんだ? 化学物質で考える」をテキストとして、この勉強会用に作成したパワーポイント資料も使って講義が行われました。

第1回は「リスクアセスメント入門」を行い97名の参加がありました。勉強会終了後のアンケートで「時間が足りない」、「スピードが速くてついていけない」などの意見がありましたので、第2回、3回は30分延

長して3時間の勉強会としました。

第2回は中級編として「リスク評価のシナリオ」について、第3回は応用編として「ReachとEUSES」について勉強を行いました。

中級編、応用編となるにしたがって難しくなり、受講者も一生懸命勉強をしていました。3回終了後のアンケートでは、約80%の方が「よくわかった」、「だいたいわかった」という回答でした。自由意見としてもリスク評価の全体が理解できた等の意見があった反面、やはり難しかったという意見もありました。

今年度の会員交流勉強会の特徴

JRCC 会員交流 WG 主査 塩崎 保美

今年度の会員交流会のテーマ及び実施方法については、今までと違った、工夫を施してみました。即ち、一つのテーマにつき、基礎から実践までを、系統的に勉強し、会員の知識の向上や実務により役立つことを狙いとしていました。テーマには、最近の国際動向を踏まえ、「化学物質のリスクアセスメント」を選定し、3回のシリーズで実施しました。講師は、リスク管理の権威者でかつ業界の事情に精通した花

井莊輔氏をお願いしました。

また、参加者の勉強の助けとなるよう、講師の著書「リスクってなんだ? 化学物質で考える」をテキストとして参加者全員に配布しました。

第1回は、テキストを使い総説をしていただき、講義終了後、参加者の感想、希望、意見をアンケートで聞き、次回、次々回の勉強内容に反映しました。第2回は、リスク評価の具体例を、第3回は現実の問題として浮上している

「REACH」の内容も加味したリスク評価の詳細を講義していただきました。花井先生は非常に熱心で、周到な準備（アンケート結果の解析を含む）と丁寧な説明で、参加者に充分満足していただいたと思っています。

参加者の皆様には、これを契機に、リスク管理のレベルをより一層向上させ、実務に反映させていただくことを期待しています。

海外 RC 情報

キャパシティ・ビルディング

バンコクにおけるワークショップ



日化協—JRCCは2003年にベトナムとタイでレスポンシブル・ケアのキャパシティ・ビルディングを実施しましたが、これはJETROのODA事業に協賛し講師と教材を提供したものです。その後マレーシア、インドネシア、フィリピンを加えた東南アジア5カ国を対象国とし、化学品管理に関する各国の中核あるいは指導者層の育成を目的として、教科にGHS(化学品の分類と表示に関する世界調和システム)を加えるプログラムを編成し、主催者としてAOTS(海外技術者研修協会)も加わり3年計画のプロジェクトとして実施されました。

この事業は2006年度を以って無事終了しましたが、各国から継続の希望が多く、一方では上述の5カ国のほかカンボジア、ラオス、ミャンマー(以下CLMと称す)などからも同様なワークショップの開催要望が日本(経済産業省)に寄せられました。これを受けてAOTSの主催で指導者コースとCLM向けキャパシティ・ビルディングが新たに発足しました。今回は8月バンコクで開催されたワークショップについて報告します。

ASEAN 向け産業 および環境保護コース RC 活動、 GHS 中級コース

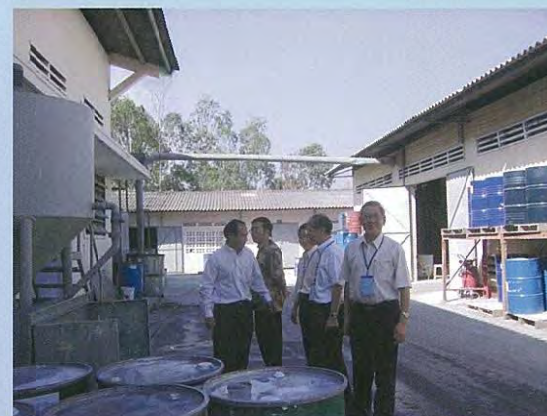
コースの名称を示しましたが化学産業従事者と政府関係者にRCとGHSを紹介する内容で、予備知識のない受講者でも一気に相当のレベルの知見を涵養しうることを目的とし、そのため新たなプログラムを用意しました。これが最大の特徴ですが、他にも特記すべきことがあります。



一つはCLM向けではありながらASEAN 5カ国(上述)からも少数とはいえ受講者を受け入れたことです。もう一つは従来のGHSワークショップの指導者コースを修了したタイ人のひとり講師として招聘したことです。写真の黄色いシャツを着た人がその人で、タイRC協会の幹部で現在GHS導入のために講師として活躍している専門家です。このコースは演習の比率が多かったのが特徴といえますが、その結果グループ作業が主になります。そのメンバー構成を意図的に各国混成としました。演習には情報収集や課題資料の作成、発表、質疑などがありますが、それらを互いに異国のメンバーが協力して実施する訳です。勿論一部を除いて各メンバーとも初めての経験で、最初こそ戸惑いを見せていましたが最終的には「融合」し、置かれた状況を楽しんですらいました。事実このコースのメンバーは従来のどのワークショップにも増して仲良くなったような気がします。

東南アジア地区で化学に携る官民の有力なメンバーが、このような機会を通じて友好を深め情報網を築いたことは、当初の目的をはるかに上回るものと思います。

ベトナムの RC 事情



日本レスポンシブル・ケア協議会は、2005年からベトナムのRC支援を行っています。2007年8月に第5回目の支援を行いました。

しかし、現在未だ正式なRC協会は立ち上がっていません。企業及び政府関係者からなるRCコアグループが、2004年位から協会立ち上げに努力していますが、実を結んでいません。この理由には、旧南北ベトナムの歴史的背景が関係しています。

首都ハノイはベトナム戦争に勝った人々が住んでいる政治中心の都市です。最近、新しい工業団地がいくつもでき、日本からもキャノン、日本デンソー等企業進出は目覚ましいものがありますが、化学企業に限れば、元国営企業(現在株式会社化が進行中)のみです。

これに対し、南部ホーチミンは、ベトナム戦争に負けた人々が住んでいる産業中心の経済都市で、化学企業は外資系企業と元国営企業が併存しています。ホーチミンの人はハノイの人に対し、戦争に負けたという屈辱感と経済的に優位であるという優越感をあわせ持っています。ハノイの人は、我々が政治を支配しているという優越感と経済的に遅れをとっているというもどかしさを持っています。ベトナムの国内は二国から成ると言えます。これが、RC活動にも反映して



います。

バイエル、エクソンモービル、LG Chem等ホーチミン周辺の外資系多国籍企業は、本社からの指導で実質的にRC活動を展開しています。しかし、RC協会が立ち上がっていないので、国際的にはRC活動として認められません。彼らは、一刻も早いRC協会設立を願っています。しかし、一国を代表する協会となると、政治都市ハノイに本拠地を置くことになり、地理的に離れます。また、外国企業を会員とする組織の設立が法律上許可されない問題点もあります。では、彼らの協力なしにRCが推進できるかという点、元国営企業の実力としてなかなか厳しいものがあります。これがなかなかRC協会が正式に設立できない理由です。

このような状況下、JRCCはRC協会設立に必要な文書の提供、コアグループメンバーの教育を通じRC協会設立を支援しています。一方、元国営企業をハノイ周辺で2社、ホーチミン周辺で3社選定し、個別にRC活動導入を指導しています。

国の事情が困難でも、RCは展開できるという良い事例になればとの思いで、RCコアグループと知恵を出し合いRC支援を続けています。

ecoの空騒ぎ

7月21日の日曜日に、学生団体のアイセックが主催する"ecoの空騒ぎ"と題した環境に関する討論会が上智大学で開かれ、JRCCから富士フィルム(株)津田氏と、(株)ADEKA安田氏および事務局が参加しました。企業からは、他にサッポロホールディングス(株)福地氏が参加されていました。本会は、昨年度のJRCC環境交流会に参加したアイセックの事務局担当が主体となって開いたもので、学生らしく軽いノリのテーマでしたが、環境交流会の取り組みが広がったという点で、大きな意義があったと感じています。学生は、アイセック加盟大学を中心に約30名(一橋、慶応、津田塾、上智、東京、中央等)が参加していました。

プログラムは1)オープニング、2)各企業のプレゼンテーション、3)パネルディスカッション、4)クロージングという順に進められました。パネルディスカッションは、学生が交代で計8名が前席に座り、一方企業参加者は他学生と同じく一般席に着席して、学生からの質問に答える形で進められました。また、逆に企業側からも質問を投げかけました。

地球温暖化防止への対応については、企業は温暖化ガスの削減に真摯に取り組んでいるとともに、各国間で主導権争い等の微妙な対応の差があり、科学的な問題というより政治問題となっているという解説がなされました。さらに、日本の削減量が少ないのではないかと質問に対し、参加学生より「日本は公害やオイルショックを契機として、省エネに他国よりいち早く取り組み、京都議定書締結時には、他国に比べGHG排出量を既に大幅に削減していたという事実を考慮すれば、決して少ないわけではない」という回答がなされ、良く勉強している学生もいると関心しました。

また、企業は最近CSR活動に取り組んでいると宣伝しているが、イメージUPによる販売増を狙いではないかという厳しい質問もありました。これに対し、「正直なところそういう側面もあることは否定できない。企業はコスト削減が重要な課題ではあるが、昨今は消費者の目が厳しく、コンプライアンスを軽んじる企業は存続できない現実があり、CSR活動は必要と考えている。また、情報開示によるコミュニケーションは、CSRが言われる前から行っている」という説明が行われました。

結局、温暖化問題・環境破壊については、大多数の個人が現実の自分の問題だと認識することができず、個人個人の欲求のままに生活していることが根本的な問題であるという認識に落ち着いたようです。

全体的には、企業側の回答も公式見解は見解として、個人見解とことわった上で率直な回答も行ったことか



ら、討論後に学生より「企業側の本音」というものがとても新鮮に感じられた」という感想が寄せられました。

学生自身が主催して進行し、さらにまじめな問題に対して多くの学生が参加したこと、本題とは少しそれますが、パソコンを駆使して音楽や映像をその場で取り入れて映写するなど、企業側としても学ぶべきことが多かったと思います。

平成19年度 地域対話開催について

JRCCでは地域住民の方々に会員各社のRCの取り組み状況を報告して、住民からの意見、要望等について議論を行い、相互理解が得られるように地域対話活動を進めています。

JRCC設立の翌年の1996年に鹿島コンビナート地区で初めて開催しました。その後コンビナート地区だけにとどまらず、現在では下図の15地区でそれぞれ隔年開催しています。各地区とも充実した対話集会となるように、工場見学と組み合わせたり、パネル討論を取り入れたり工夫を重ねています。

今年度の実施予定地区は下記の通りです。

地区	開催予定日
山口西地区	2007年11月17日(土)
堺・泉北地区	2008年1月29日(火)
大分地区	2008年2月16日(土)
富山・高岡地区	2008年3月1日(土)
岩国・大竹地区	2008年3月10日(月)
川崎地区	2008年3月



地域対話以外にも、会員各社は事業所ごとに地域住民の方々と対話を進めています。JRCCのアンケートでも会員の2/3が地域住民との対話の機会を持っているという回答がありました。

今回は、その1つとして富士フィルム(株)小田原工場での対話集会を紹介いたします。

「富士フィルム環境対話集会 in 小田原」

神奈川工場小田原サイトは、液晶ディスプレイ材料、記録メディア製品、各種化学薬品を製造しています。工場は新幹線小田原駅に近く市街地に立地しており、当社の環境保全活動や安全防災活動を地域の方々にご理解いただくことは非常に重要であると考え、神奈川県・小田原市の協力を得て平成19年10月13日(土)に開催しました。富士フィルムとしては神奈川工場足柄サイト、静岡県の富士宮工場に続き3回目の開催となります。目的は①当社の環境・防災への取り組みをご理解いただくこと、②直接の質疑により地域の方々の関心事を再確認し、取り組みの改善に反映していくことです。

概要：参加者157名(自治会関係、近隣への通勤・通学者、一般応募、行政、取引先企業)

工場見学後の意見交換会では、当社のプレゼンテーションに基づき、パネルディスカッションを通じ、事前質問、当日の質問票も含めて参加者との質疑応答を実施。ファシリテーターは関東学院大学 織朱實先生、化学物質アドバイザーは小林史朗氏。



実施結果としては、大変多くの方の参加をいただけたこと、参加者との活発な意見交換ができ、参加者の理解の進展、企業として配慮すべき観点が明確にできたと考えています。

富士フィルムは、各事業場において順次環境対話集会を開催していく予定です。

RC 検証を受審して

旭化成株式会社 富士支社長 勝又 勉

富士支社のビオトープ



旭化成グループは、化学、繊維、建材、住宅、エレクトロニクス、医薬・医療等の多くの事業を手がけておりますが、日本レスポンシブル・ケア協会の設立当初より活動に参加し、「環境保全」、「保安防災」、「労働安全衛生」、「健康」、「製品安全」、「社会とのコミュニケーション」を全事業分野のRC活動の柱として、全社の最重要課題に据えて取り組んでいます。

富士支社は、昭和33年に静岡県富士市に設立され、当初はアクリル繊維および高度化成肥料の生産拠点として生産活動を続けてきましたが、50年後の現在は、エレクトロニクス材料・部品、感光材、機能膜等の最先端製品の開発・生産の一大拠点に変わりました。現在10工場と研究所、併せて約1,400人の従業員が働いています。

今回「旭化成グループCSRレポート2007」の記載内容と支社等のサイト報告データ、資料の整合性確認の一環として6月4日に審査を受審しました。富士地区のRC検証受審

は2003年に引き続き2回目となります。

事前にJRCCより本社経由で受領した質問事項に従い、富士支社のRC関係パフォーマンス資料、データを整理し、受審当日は主要工場の担当責任者も同席し、実務について説明するようにしました。この他、平素から取り組んでいる産廃の分別・回収、リサイクルの状況、支社を挙げて取り組んだ、専門家指導による大型ビオトープ整備等も現場に足を運び評価していただきました。

今回、特に「水質汚濁防止の環境管理体制」及び「法令遵守の徹底」というテーマでの確認があり、工場の実際の分析から官庁届出資料作成までのフローを説明しました。この説明の中で、工場管理者による分析データと転記資料の突合せチェックを行っていることに対し、なかなか宜しいとの評価をいただきました。

余談となりますが、その後の7月に富士市管内で製紙会社の環境報告値改ざん問題が新聞等で報じられ、市内各工場への行政の立入りが一斉に行われました。当支社にも市の係

官が立入りましたが、短時間のうちに何ら問題ないことを確認していただきました。この件では、市内の多くの工場で改ざん、或いは違反の見落とし等が発覚し、大きな問題となりました。

一方、検証時の指摘事項ですが、産廃の有効活用に関する一部の集計資料で、データの中間集計時に前資料からの転記数値が記載されていないために、審査員が作成者の詳細な説明なしに確認することができず、トレーサビリティ上の問題について指導を受けました。データ、資料について誰もが容易にトレースできる資料を残すよう、常日頃から注意していなければいけないというよい教訓になり、早速対応いたしました。

最後に書類審査、現場確認においても、的確な指摘、指導をいただき感謝いたします。これまでのRC活動を継続すると共に、今回の指摘、指導を生かして更に分かりやすい活動となるよう努力していく所存です。

検証員紹介

質問項目 ①出身会社 ②職歴 ③検証における強み・心がけていることなど ④趣味 ⑤その他

杉浦 伸夫



- ① JSR 株 (2006年9月定年退職) 検証員になったばかりの駆け出しですが、フレッシュな気持ちを大切にしながら検証の経験を積みたいと思っています。
- ② 千葉工場次長、本社環境安全部長 (日化協環境部会の部会長)、鹿島工場長が主な職歴です。製造現場の経験が長く、合成ゴムラテックス、合成ゴム、合成樹脂、モノマー抽出、光ディスク製造プラント、エマルジョン排水やメッキ廃液の処理プラントの運転・管理を経験しました。
- ③ 環境保全、保安防災、労働安全衛生の検証に今までの経験が生かせると考えています。
- ④ 趣味はスポーツ (やる、観る; サッカー、ラグビー、漕艇、各種のかけっこ)、バードウォッチングしながらの山歩き・川歩き、読書、料理づくり (単身赴任中に目覚め、肉じゃが、切干大根、ヒジキ、おからなどのお袋料理が得意)
- ⑤ 広島県三原市出身、以後京都市、大津市、四日市市、鹿島 (波崎町)、甲府市、市原市、千葉市 (稲毛海岸)、習志野市、鹿島 (神栖市) と転居続きの渡り鳥生活を経て、習志野市に落ち着きました。

福間 康之臣



- ① 旭化成株
- ② 1982年～1996年まで、薬品工場プロセス開発を担当。1996年～2000年、JCIA 出向、化学物質総合安全管理を担当。2000年から現在まで JRCC で検証業務を担当。
- ③ JRCC における検証制度の立ち上げ経験と ASEAN 諸国での企業検証経験 (欧米系外資企業を含む) があります。
- ④ 現在の趣味は、田園散歩 (居住地周り) と古い秋葉系オタク (オーディオアンプからスピーカーに至るまでの自作) です。これからは、ロードレーサーでサイクリングをしようかと思っています。かつては、写真、陶芸、ブルーベリー栽培、熱帯魚飼育、ジョギングとオタク的なものに手当たり次第手を出していました。
- ⑤ 岡山県瀬戸市内に生まれ、のち岡山市、伊丹市、西宮市、吹田市、京都府左京区、川崎市、板橋区、富士市、延岡市、と現在の笠間市 (通勤時間片道2～3時間) に至るまで22回転居しています。

森田 正利



- ① 昭和電工株
- ② 昭和37年入社後、主として3工場で有機化学製品 (酢酸・酢酸エチル) 製造オペレーターに従事したあと、昭和51年～53年大分コンビナートの環境保安部で主として労働安全を担当しました。平成元年からは、平成12年に退社するまで本社の環境保安部で労働安全衛生を担当するほか、工場及び関係会社の環境保安査察 (RC活動検証) 等、グループ全体の活動レベル向上業務に携わりました。また、日化協、石化協、ソーダ工業会の労働安全衛生活動の委員としても参加、日化協では「はさまれ巻き込まれ災害防止」「薬傷災害防止」指針の作成に携わりました。JRCCの検証員としては、これまで、RC活動の基本、検証技術を習得しつつ10社の検証を経験し現在に至っています。
- ③ 製造現場を経験し、また、工場・本社の労働安全衛生を担当し、多種多様な事故・労働災害に接してきましたので、事故・災害の怖さ、災害発生要因、背景課題を十分認識しており、その経験が他の検証にも生かされればと思っています。
- ④ 趣味として特筆するものはありませんが、映画・音楽鑑賞、読書、旅行、散歩等です。
- ⑤ 京都の綾部市で生まれ、山口県の瀬戸内海の島 (笠戸島) で育ち、就職後、新潟→山口→大分→東京→神奈川と転地し、現在は神奈川県平塚市に居住しています。

就任のご挨拶

日本レスポンシブル・ケア協議会
事務局長 西出 徹雄



本年7月1日に日本化学工業協会専務理事およびJRCCの事務局長に就任しました。個人的には長年行政の立場から化学産業や環境問題に関わってきましたが、この3年ほどは塩ビ工業・環境協会で環境安全問題やリサイクルの問題に取り組んできました。

レスポンシブル・ケアのスタートは20年ちょっと前のカナダですが、日本においてもJRCCとしての活動には1995年以来既に10年を超える歴史があります。最近の動きを見ますと、国内ではレスポンシブル・ケアと一見似たような感じのCSRの運動が化学産業以外をも含めた形で大きな広がりを見せていますし、国際的には化学業界全体でGlobal Product Strategy (GPS) の推進が国際化学工業協会協議会 (ICCA) に

おいて重点活動項目として取り上げられています。化学産業、化学企業として自ら生産供給する化学物質や製品に対して、そのライフサイクル全体を通じて責任を持って管理する姿勢はCSRやGPSの原点であり、パフォーマンス改善としての成果を問われています。また、経済、企業活動のグローバル化が進む中で、今後発展を続ける途上国ではこれから

レスポンシブル・ケア活動の本格的な展開が期待されています。化学産業を取り巻く環境が大きく変貌を遂げる中で、日本国内でのレスポンシブル・ケアを更に進展させるとともに、途上国への支援も強化し、消費者や社会から信頼される化学産業となるよう、皆さんとともに努力してまいりたいと思いますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

レスポンシブル・ケア報告書 2007 を発行します

JRCC では会員の RC 活動やその成果をまとめた「レスポンシブル・ケア報告書」を毎年発行しています。本年度はよりわかりやすく、見やすい報告書となるよう写真を多く入れたりと、構成に工夫を凝らしました。またパフォーマンス調査については日化協のデータを多く採用しました。レスポンシブル・ケア報告書 2007 は 11 月下旬に発行の予定です。

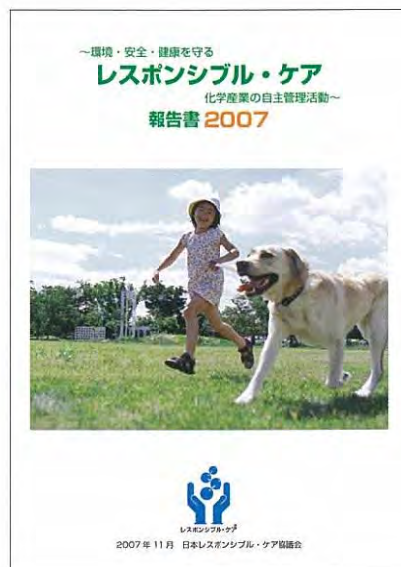
また報告書の内容の報告会を下記要領にて開催いたしますので是非ご参加ください。

<報告会内容>

1. 報告書についての説明
2. 生物多様性に関する企業の取り組み事例発表
3. 生物多様性についての特別講演

<開催日、場所>

東京地区：12月11日(火) 13:30～ 発明会館(東京都港区)
大阪地区：12月20日(木) 13:30～ 堂島ホテル(大阪市北区)



JRCC NEWS

RESPONSIBLE CARE 2007

No.47
AUTUMN

表紙写真：ホシガラス
撮影：小林正一
(サン・ペトロケミカル)

Index

Voice	独立行政法人 製品評価技術基盤機構 理事長 御園生 誠	2
化学業界の安全活動についてDVDを作りました		3
ICCA-RCLG 総会参加報告		4
from Members【第43回】	三菱ガス化学(株) 代表取締役 専務執行役員 上松 正次さん	6
RCの現場を訪ねて	积水化学工業(株) 滋賀水口工場 (株)日本触媒 川崎製造所	8
リスクコミュニケーション研修会		10
平成19年度 会員交流勉強会が盛況のうちに終了しました		11
海外RC情報		12
TOPICS	ecoの空騒ぎ	14
平成19年度 地域対話開催について		15
RC検証を受審して	旭化成(株) 富士支社長 勝又 勉	16
検証員紹介		17
就任のご挨拶	日本レスポンシブル・ケア協議会 事務局長 西出 徹雄	18
JRCCだより		20

編集後記

● 本号から編集を担当することになりました福光です。よろしくお願いいたします。今回は初めてのこともあり、11月ぎりぎりに発行することになりました。次号からは早めに発行できるよう頑張ります。

● さて、今回から「RCの現場を訪ねて」は直接現場を訪問して、取材をして記事にすることにしました。現場の方々は当たり前と知っていることも、外部からは珍しかったり、新鮮なことがありますので、このあたりを皆様にお伝えできればと考えています。ご意見、ご要望等ございましたら事務局までお知らせください。

● 表紙の野鳥シリーズの写真、そして裏表紙の写真とも皆様からの投稿をお願いしています。裏表紙の写真については、内容は問いませんが、季節にマッチしたものを取り上げていきたいと考えています。奮ってご応募ください。